

山中信夫先生のご退任にあたって

黒 野 豊

「気が重い時、焦々した自分に気付いた時鏡の中の自分に向けてにこりと笑ってみる」、或は「朝、家を出る前鏡の中の自分に微笑んでみせる」、と先生が語られたように思う。いつ何処にお書きになったのか記憶にないのだが、これは先生のご自分との付き合いの仕方を、或は他人との付き合いの仕方の背景にある何物かを示唆してはいないだろうか。人はともすれば自分に対して他人に対してもギクシャクした関係をもつことになる、だからこそ努めてにこやかに振舞おうとしなければならないのだ、と解釈したら筆者の思い過ごしであろうか。

山中信夫先生は旧制第一高等学校を卒業され、東京大学法学部で学ばれる途上、文学部英文科に移られた。「英文学への想い止み難し」であったのであろうか。1950年3月東京大学文学部（英文科）をご卒業後17年間、都立駒場高校、戸山高校で教鞭を執られた。67年から6年間東京薬科大学で助教授、教授として務められた後、73年から21年間本学文学部教授として活躍され、多面にわたる業績、実績を残されている。

研究、講義の対象として取り上げてこられた英国の小説家は18世紀から20世紀までの幅広い領域にわたっていて、先生が熱愛されるジェーン・オースティン、E. M. フォースターばかりではない、ヘンリー・フィールディング、ローレンス・スターンからチャールズ・ディケンズ、ブロンテ姉妹にも及んでいる。先生は鋭利な批評眼、柔軟な感受性・文学的センスの持主であり、また文学理論の面でも造詣が深く、たとえばドゥルーズ、ガタリ、ラカンといった理論家達が本邦に紹介された当初から関心を示され、それを講義に生かされていた。一見して平易なようでありながら取り上げにくい、「英文学へのアプローチ」といったテーマを噛み砕いた表現で語られる先生は、また例えば「小説の中の時間」「小説における愛の諸相」という文学の根本的な問題をしばしば取り上げてこられた。

初期にお書きになった E. M. フォースター論で、後に英国の批評家達が言及しはじめる、この作家の同性愛的傾向を指摘されているが、後年、東京女子大学紀要『論集』第26巻（2号）に載せられたフォースター論「*The Longest Journey* 再読」で先生はこう述べておられる。「作家にとって、ただ単に homosexual であるということは取り立てて問題となることではない。（中略）‘conventions’に深く馴染んだ自分の肉体が、同時に腕に喰込んだその鉄の鎖を解き放たなくてはやまない憎悪の火にもえている。その二律背反に金縛りになったまま身動きもせず、己の尾を呑む蛇のように矛盾分裂そのものと化した精神構造——それこそ Forster の宿命といえる。」この優れて鋭利な

洞察のもとに 40 頁に及ぶ論が展開されている。フォースターの本質をついた好論文である。先生は小説作品を解釈する際、人間の屈折した心の襞を捉えることを第一の基本とされ、お書きになったものはいずれも珠玉の煌きを放っている。『英米文学の女性たち』(南雲堂、1986 年) 所収の、ジェーン・オースティン論、「ファニー・プライスのこと」もまた先生の読みの深さ、人間洞察の鋭さを示す好個の例である。冒頭部から任意に引用させて頂こう。「オースティンの場合にも(中略)日常の些事が些事のまゝ深い意味に染まるのである。こうして多くの評家が『マンスフィールド・パーク』から拾いあげ、その象徴的な相を照らし出そうとする箇所は果てしなく重なりあって、かえって不透明感を増すばかりのようである。」そして文学批評の規範とも言える文章が果てしなく展開されるのである。

退職なさる際『東京女子大学学報』(94 年 3 月 25 日号) に、先生は「今更口にするのは恥ずかしい限りだが、実は、やっと自由の身になって、いよいよ自分のしたいこと、自分の研究ができるとワクワクしているのである」とお書きになっておいでだが、大学行政面でのこれまでのご多忙ぶりを考えれば、誠に宜^{むべ}なるかなと頷けるのである。

先生は事務処理においても管理面においても優れた能力を発揮され、本学に赴任された当初から、英米文学科の極めて煩雑な業務を手際よく処理され、同僚達を瞠目させた。その後、長期検討委員会委員、カリキュラム委員会委員長、英米文学科主任、学部長補佐、文理学部長、大学院合同科会議教務委員長、大学評議会委員などの要職につかれた。85 年から 89 年に至る 4 年間、哲学科再建、短期大学部の 4 年制学部への昇格、文理学部の入学制度改革と教育課程改正など、困難な諸問題を処理すべき時期に文理学部長の重責を担われ、見事な管理、行政能力を示されたと言えよう。とりわけ哲学科再建についてはご自身再三再四様々な表現で語られ、例えば先の『学報』では「苦痛と犠牲を強いるもの」であって、ご自身は「ただ…堪えてゆくのみ」と苦汁にみちた文章を記されている。

個人生活における先生は、相当な贅沢屋であり、また気儘ですらある。気が向けば真夜中から朝方まで研究活動に勤しみ、昼間はいつまでもおやすみという、世間的な時間を無視した生活を送られること度々である。かと思えば、時代の先端をゆく品々を購入し活用され同僚達を驚嘆させる。例えば、通常多くの人々が NEC98 を使用していた時期に、ユーザーも少なくまた高価でもあるアップル・マッキントッシュが使われていたらしい。その後 CD-ROM 版 OED をソニーのクォーター L で使い始め、ただ検索するだけでなく、プリント・アウトして学生に配布されていた、という。更にスキャナー、OCR ソフトを駆使して英文書を、コンピューター・テキストに読みこみ、たとえば試験問題の作成編集にも活用されるといった具合で、常に先駆的なパソコン・ユーザーでいたらしい。

ご退任後も先生には、非常勤講師としてご協力願ひ、学科を支えて頂いておりますが、どうか多面的な若さを大切になさり、お健やかにご活躍されるようお祈り申し上げます。